

ニューヨークのキリスト教

大林 浩

ニュー・イングランドの組合教会の独立精神とバプテスト教会の自由思想を持って、改革派、長老派をも含めた、所謂ピューリタンのキリスト教が英国植民地諸州を独立へと導いたのが 18 世紀、東部 13 州がアメリカ合衆国となり、南と西へと拡張する段階でメソジスト教会が重要な役割を果たしてこれに加わった。これらの教会は南北戦争というアメリカ史上大危機をも乗り越えて、国民を支え続けてきた。アメリカでメインライン（主流）の教会と呼ばれているのはこれらの教会である。アメリカが東部大都市を中心として近代化に向かい、ヨーロッパ先進国の仲間入りをしかけた 19 世紀末から、そのメインラインの諸教派の中に対極化が生じた。一つは近代思想と工業化に伍して行こうとするリベラルな思想と、近代化を世俗化と受けとってそれを拒む保守的福音主義との対極である。20 世紀に入り、アメリカがヨーロッパ列強に加わる時点で、対極化は頂点に達する。保守的福音主義は更に先鋭化して、ファンダメンタリスト運動となり、リベラルな教会はロシア革命さえも、希望の眼差しで観察していたものである。この対極化は 1925 年の所謂「モンキー裁判」に於いて頂点に達し、そこでファンダメンタリストは勝訴こそすれ、社会の物笑いとなった。それ以降、発言力はリベラルな教会に独占されてしまった。それは北部と南部、都市と田舎、進歩思想と保守主義との対立を物語っていた。それ以後、第二次世界大戦、冷戦、ベトナム戦争時代を通じ、1970 年代までメインラインのリベラルな教会がアメリカに於ける教会の発言力を牛耳って来た。

このリベラルな教会と進歩思想全盛期を代表していたのがニューヨークのユニオン神学校であり、隣接するリバーサイド通り 475 と通称されているインター・チャーチ・センターである。そこにはメインラインのプロテスタント諸教派の本部ないし支部が結集され、リベラルな教会の結束した力が発揮されていた。

ラインホルト・ニーバーがユニオン神学校の教授としてアメリカ国内の政治や国際関係に力強い発言をし、ポール・ティリッヒが同じユニオンで次々と宗教と文化の有機的な関係について、前向きな思想を打ち出していた頃のユニオンには世界中の学者や学生達たちが集まって来た。その二つに隣接して三位一体をなしていたリバーサイド教会は同じリベラルな福音のメッセージを社会問題に対して語り続け、第二次世界大戦以後、公民権運動やベトナム戦争の時代を通してリベラルな教会の働きを力強く感じさせていたものである。

ところがニクソン大統領の時代を皮切りに保守思想が同じメインラインの諸教会に盛り返した。1925 年のあの「モンキー裁判」で物笑いになって、世論に対する力を失ってしまっていたファンダメンタリストのキリスト教が 1970 年代にはキリスト教右派という形をとって、ニクソン、フォード政権下ではモラル・マジョリティ（道徳的多数者）という旗印のもとに共和党の保守政

治を助け、レーガン、ブッシュの時代には、驚くべき財力と結束力で地方選挙の趨勢を変え、ワシントンに多くのロビー・グループを設けて議会に働きかけ、政治を右寄りに舵をとった。リベラルなキリスト教の声は細々と神学界の内側で聞こえるのみで、社会的なインパクトは感じられなくなった。恰もそれを象徴するかの如く、リベラルな東部の神学校は右に傾く教会からの支援を失い、多くは財政危機に見舞われた。嘗ては 120 丁目の市街一区画全体を要塞のように厳然と占めて、存在感を感じさせていたユニオン神学校も、その建物の西半分はコロンビア大学に買取り同様の 99 年契約で賃貸され、既にコロンビアの宗教学部に占拠されている。ノックス・ホールは今改修工事が進んでおり、そこにコロンビアの経済学、社会学その他の学部が入居する予定となっている。世界でも有数のユニオン神学校図書館、学問の殿堂にとっては心臓部ともいべきものが既に数年前にコロンビア大学の手に渡っており、その中に秘蔵書として財産をなしていた中世のタルムードなどは以前すでに高額で手放されてしまっている。ユニオンにとってはこれらは半永久的縮小を意味している。

インター・チャーチ・センターからは、長老派が本部をケンタッキーへ移したのを皮切りに、各教派にニューヨーク離れの傾向が強くなった。

それでは、三位一体のリバーサイド教会はどうかというと、ニューヨークにおける諸教会は今でも力強く働いている。神学よりも、組織よりも、人々によってなる、地元の教会が生きたキリスト教であるということを実に示している。リバーサイド（超教派）とセント・ジョン・ザ・ディヴァイン（聖公会）の二大聖堂は国連の所在地ニューヨークに相応しく世界に向かって働きかけている。2003 年には世界中の代表的キリスト者たちを集めて、9・11 が持ちかける問題の再検討を試みており、2004 年には、それを受けて、NCC（全米教会会議）が宗教的暴力とそれに対する信仰共同体の癒しの力について、世界諸宗教の代表者たちを集めて協議会を催している。セント・ジョン・ザ・ディヴァインは、その上、特に失業、ホームレス等の問題に対する本格的な取り組みをして、社会事業の先導を切っている。セント・パトリック大聖堂（カトリック）は、19 世紀のアイルランド移民に続き、20 世紀前半のイタリア、東ヨーロッパの移民、後半のカリブ海、中南米の移民と、数百万に及ぶ厚いカトリック移民層の支えとなってきた。五番街プレスビテリアン教会は単に大教会であるだけでなく、広くニューヨーク市民のキリスト教教育を使命とし、地の利を生かし、政治、経済、報道、芸術、教育、その他各界で活躍する専門家をその教授陣に抱え、単位取得可能な教科を提供している。因みに本年は 64 科目で二千人以上の登録者がいる。これらの大教会は、それぞれ異なった使命と活動でニューヨーク市民または広くアメリカ社会に働きかける代表的な教会である。しかし、これらの働きも何百とニューヨークにある小さな、地域社会に根ざした多くの教会の働きにとって代わることはできない。

世界教会会議（WCC）やアメリカの全米教会会議（NCC）はそれぞれ戦後に、主にリベラルな勢力によって起動されたものであり、リベラルな力が衰えるにつれて、人々の意識からは置き去りにされる傾向にあるが、ニューヨークには古くからニューヨーク独自の教会協力態勢が存在

する。1815年にまで遡れるが、正式には1895年に結成されたニューヨーク市教会会議（CCCNY）は教派を超えて社会的正義の為に、市民の人権の為に、救貧や互助の為に教会が働くことを宣教活動として追求している。従来のメインラインの教会の指導者に加え、黒人牧師たち、韓国人、中国人移民の教会指導者たちの働きが最近目覚ましい。この協力態勢が最も強く生かされたのが、9・11の時である。マンハッタンの各教会が緊急避難所を提供したり、献血、食料調達に大きな働きをしたことはいうまでもない。特に世界貿易センター（WTC）のツインタワーに近い地域の教会や牧師館などが長期に亘って住居を提供したことも知られている。厚い灰に覆われた何千何万というアパートの住民が住居を失ってしまったからである。それら物理的な救済事業だけでなく、教会は魂の拠り所として本来の真価を発揮した。各教会は昼夜門戸を閉ざすことなく祈祷の場所となった。特にWTCの近く、ウォール街にある聖公会のトリニティー教会とその聖パウロ会堂は祈りの火を絶やすことなく、人々がてんでに持ち寄る花束に埋まる哀悼の場所となった。

9・11事件のすぐ後、2001年9月23日にジュリアーニ市長の依頼で、ヤンキー・スタジアムに於て、ニューヨークの多くの宗教共同体、キリスト教、ユダヤ教だけでなく、今では人口でも力を増しつつあるイスラム、ヒンドゥー、シーク等の共同体にも呼びかけて、一大祈祷会が開かれた。ムスリムに対する風当たりを防ぎ、彼らの安全を願うと共に、テロ攻撃の犠牲者の魂のため、またこの危機を乗り越える市の為に祈りを一つにした。ムスリム、ヒンドゥー、シークの聖職者に加わってキリスト教、ユダヤ教の牧師、神父、ラビたちも祈りで力を合わせた。その中の一人、ミズーリ宗会ルーテル教団の大西洋岸教区長であるブルックリンのベンキー牧師も壇上に登り真摯な祈りを添えた。ところが数日も経たぬうちにミズーリ州の本部からベンキー牧師に停職の辞令が届いた。キリスト教の祈りを他宗教の教師たち同席の場で捧げて、福音を汚した行為、他宗教の神々を認めた背信の行為として糾弾されたのである。アメリカにはこうした声はまだ多く残っている。ミズーリ宗会のルーテル教団はウィスコンシン州のそれと並んで多くあるルーテル教団の中でも特に保守的である。恐らくそうした保守的キリスト教の力の方が未だに強いのではなかろうか。しかし、ニューヨークは異なる。キリスト教が前進的に多くの宗教と和して行こうと最先端を走る場所である。現に、（我々のラトガース大学が2005年9月25日に全学で迎えたそのすぐ翌日）ニューヨークのリバーサイド教会はチベット仏教のダライ・ラマ師を迎えて宗教間の理解協力の会を催すことになっている。

リベラルなメインラインのキリスト教が影響力をうしなした理由の一つには、保守政治の政策の一環として、報道の極端な自由化が執行されたことにある。以前は限られた数の主要テレビメディアの基準と良心的な報道が保たれていたが、レーガンの時代には全国にテレビ局が林立し、その多くを財力に恵まれた保守的キリスト教が買い取り福音放送局とし、電波を通して保守的乃至ファンダメンタリスト的メッセージを流し続けていることにある。そうした、はしたないやり方に訴えることも、財力にも恵まれないリベラルは次第に勢いを失って行った。しかし原因は

リベラルの側にも考えられる。それはリベラルな教会の宣教が社会の共通善に対するメッセージを明らかにしていないことにある。福音を正しく語るならば社会の根本的な問題への態度が自ずと明らかになる筈である。共通善への福音の態度は中世カトリック、特にアキナスの神学においては明確に示されていた。それが鈍るとキリスト教のメッセージは周辺的問題へと引きずられていく。ゲイ（同性愛者）同志の結婚とか、人口中絶、堕胎の問題とか、それ自体たしかに重要な問題ではあるが、キリスト教のメッセージの中心ではなく、社会の共通善に対する福音のメッセージを正確に捉えておれば、己ずと態度が明らかになるであろう諸問題である。そうした周辺的問題へとキリスト教が押しやられることによって、メインラインの声が薄くなった。右派のキリスト教は正にそのような焦点の横取りによって勢いを増し、最近の共和党政治を推進して来た。

リベラルは福音をその本筋に戻し、社会の公共善の核心に向かって語りかけなければならない。その兆しがあちこちに感じられる、ニューヨークの聖公会ゼネラル神学院は最近デズモンド・トゥットゥ研究所の定礎式を終えた。世界の平和の為に、諸宗教の和解、世界の紛争勢力の和解の為の研究、研修の場となることを目指している。NCCは2005年7月にアメリカのイラク政策に向かって確固たる態度を示し、戦争反対の声明を公にした。

終わりに希望の光を投げかける小さな教会についてお知らせしたい。それは WTC の巨大なツインタワーの瓦礫の中に消えたギリシャ正教の聖ニコラス教会のことである。1832年にその地に建てられた、間口7メートル奥行き17メートル程の住宅を1916年にギリシャ人移民たちが買い受けて開かれた教会、一世紀近く、ニューヨークのギリシャ人及びニューヨークを訪れるギリシャ人たちに親しまれ愛されてきた教会であった。ツインタワーに付随する数々の巨大な建物に囲まれて、小さくはあるが、立派に教会として使命を果たしてきた教会である。しかし辺り一帯が瓦礫と化した時には、その灰燼の中からは、教会の一冊の本、聖壇にあった小さなベル、そして塔の鐘しか掘り起こされなかった。その小さな教会を守って来た人たちは、WTCの跡に記念碑や新しい建物が聳え立つ時には再びその間に小さな姿を見せたいと今頑張っている。キリスト教の力はそうした小さい教会から湧き出るものである。その教会の復活によって奮い立たせられなければならない。